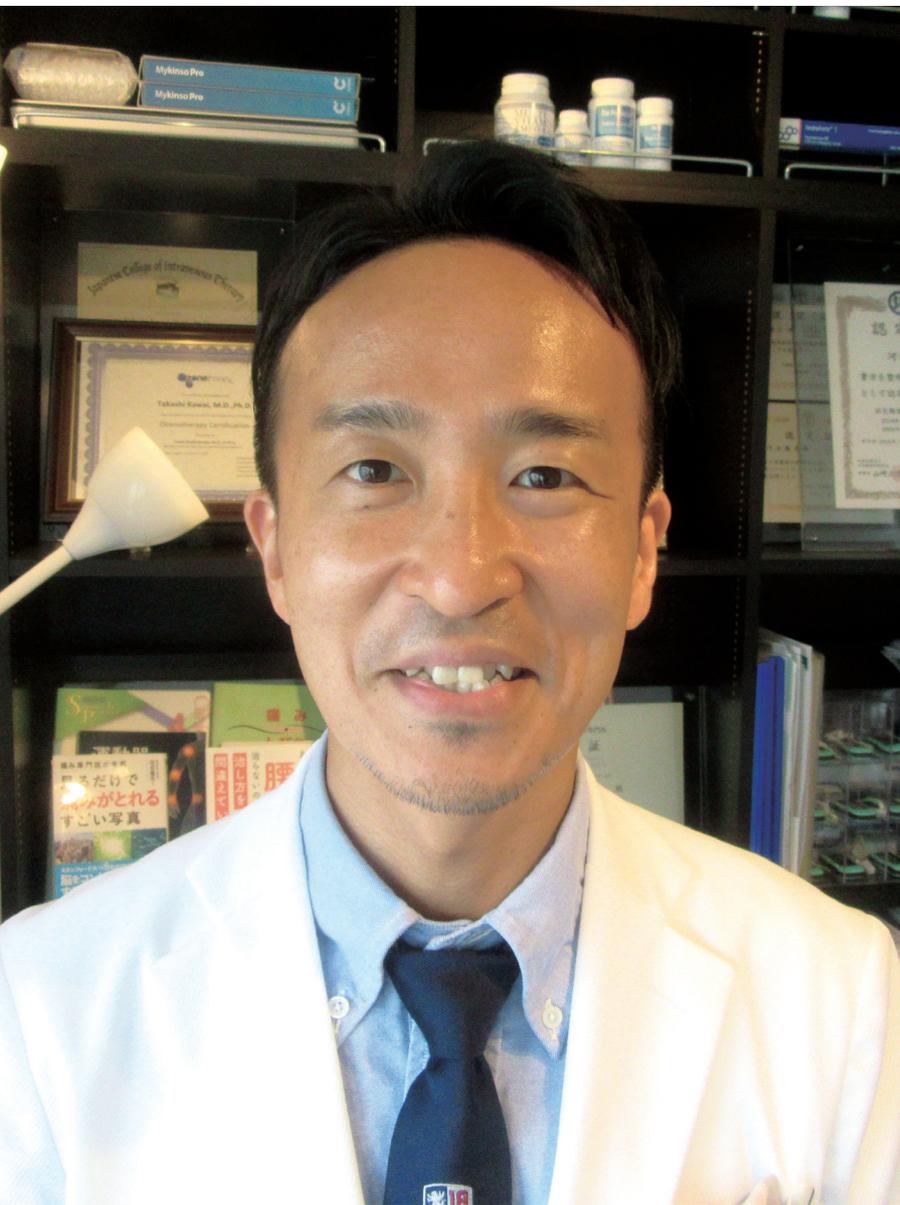


河合 隆志院長に訊く

構成／須山久里 医療ジャーナリスト

高濃度ビタミンC点滴療法はがんを攻撃し、オゾン療法はがんに負けない体づくりというイメージを持っています

もちろん私も前向きな気持ちになれるよう、
全力でサポートさせていただきます



河合 隆志(かわい・たかし)

1975年、愛知県出身。医学博士。日本整形外科学会専門医。日本抗加齢医学会専門医。慶應義塾大学工学部卒業、同大学大学院修士課程修了。東京医科大学医学部卒業。東京医科歯科大学大学院博士課程修了。愛知医科大学学際的痛みセンター勤務後、米国のペインマネジメント&アンチエイジングセンターほか研修。2016年、フェリスシティークリニック名古屋を開院。肩こり、腰痛、関節痛といった長引く体の痛み、原因不明の体調不良、がんや脳梗塞、心筋梗塞など加齢によって生じる諸問題の予防および治療に関する「最後の砦」であることを自負し、日々診療に当たっている。

戦国時代、尾張(愛知県西部)の中心地は清洲城でしたが、関ヶ原の戦い後に徳川家康はかつて織田信長が生まれたとされる那古野城があった場所に、「尾張名古屋は城で持つ」とうたわれた名古屋城を築きました。これに伴い、清洲の士民が名古屋に移り住み現在の中心市街地ができました。これを「清洲越し」と呼んでいるそうです。以後、徳川御三家筆頭の城下町として、江戸・大坂・京について発展し、現在に至っています。

今回で紹介する「フェリスシティークリニック名古屋」は、名古屋市のビジネス街にあり、地下鉄2線が乗り入れる丸の内駅から徒歩2分、名古屋駅からもタクシーで5分という好アクセスの地にあります。

クリニック名の「フェリスシティークリニック」とは、「幸福、至福」を意味し、「患者さんの幸せをお手伝いする、感動を刻むクリニック」をモットーに、がん患者さんに統合医療を提供されています。

そこで今回は、フェリスシティークリニック名古屋の河合隆志院長に、統合医療に取り組まれた経緯や実践されていらっしゃるがん治療についてお訊きしました。



慶應義塾大学大学院 理工学研究科から医師になりたくて東京医科大学に入学

——まず、先生のご経歴からお話しただきたいのですが、他の医師とは異なり当初は医学部ではなく理工学部に進まれたのでしたね。

河合 生家が自動車部品の工場を経営していましたので、跡継ぎとして期待されていたこともあり慶應義塾大学の理工学部に進学しました。しかし、子供の頃は病気になるとう開業医であった大叔父のところへ行って親身に診てもらったことから、心の中では医師に対するあこがれを持っていました。そこで、理工学部では医療機器にも関連するようにと機械工学を勉強し、大学院では医学と工学の学際領域の研究を行いました。しかし、就職を前にして医師になりたいという気持ちが抑えられなくなり、1年浪人して東京医科大学に入学しました。

「痛み」の診療に取り組むようになったのは、学生時代から肩こりがひどくて、いわゆるドクターショッピンのように次々と病院を廻ったのですが治らなかつた経験から、根本的に痛みを治療できる医師になりたいと考えたからです。

そして痛みについて学んでいくうちに、痛みは身体面だけでなく、内面までも考えたアプローチで、その患者さん全体を診ていくことが必要だということがわかりました。

内面を診るためには患者さんとじっくり向き合う必要がありますが、勤務医ですとどうしても制限があるため、自身の理想とする医療を患者さんに提供したいと考え、平成28年に「フェリシティクリニック名古屋」を開業し現在に至っています。

——今のお話しの中の、痛みに対する内面的なアプローチとはどのようなことでしょうか。

河合 私自身、肩の痛みに対して数えきれないほどブロック注射を受けましたが、まったく効きませんでした。そこで、「なぜだろう」と疑問を持って論文などを調べていたところ、身体表現性障害という「脳のストレスが体に異常を来す」という



クリニック受付



優しい照明のある待合室



カウンセリングルーム

病態に行き着きました。そこで、認知行動療法という考え方や行動に働きかける治療法を用い、痛みを解消しました。

これは、研修に行ったアメリカのペインマネジメント・アンチエイジングセンターの医師が、痛みが主訴の患者さんにオゾン療法による治療で痛みを取り除いたこと、つまり局所だけではなく体全体を診なければならぬということにも通じており、結果的に私が統合医療を取り入れるきっかけになりました。

「安静時痛」の場合は内臓が原因であることも疑う

——痛みについて学ばれた先生に、がんに関連して是非お聞きしたいことがあります。

痛みがあるので整形外科を受診したところ、痛み止めと湿布薬を処方してもらったがいつまでも治らず、

よく検査したらがんだったという話を聞いたことがあります。

河合 整形外科医として、一番気をつけなければいけない症例ですね。発見が遅れてしまえば、当然がんが進行してしまうので、診察で疑いを抱いたら必ず精密検査や専門医への紹介が必要です。「五十肩だと思っていたが寝ている間もズキズキ痛み、検査をしたら肺がんだった」「腰の痛みが、がんの腰椎転移だった」などの例もあるからです。

このような場合を一般の方が見分けるポイントは、「安静時痛」か否かということです。「じつとしていても痛い、逆に動いていたほうが痛みがまぎれる」などの場合は、がんとは限りませんが内臓が原因であることも疑うべきです。

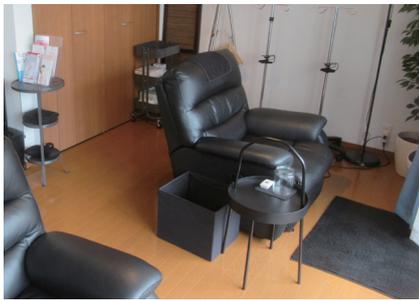
——「安静時痛」で見分けるのですね。よくわかりました。先生は、「自身の肩の痛みを脳の



シリーズ
医療の現場から



クリニック内風景



点滴療法はゆったりとした椅子で行われる



こちらは外を眺めながら受けられる

いるかを把握し
たうで治療に
入ります。そし
て、基本である
高濃度ビタミン
C点滴療法を受
けていただきま
すが、個々の患
者さんの状況に
応じて、オゾン
療法、アルファ・

リポ酸点滴、漢方治療、サプリメント治療なども行います。さらに、患者さんからのご希望にお応えして高額な治療ではありますが免疫細胞療法も取り入れることになりました。
——今、挙げていただいた療方法は、どれも副作用がほとんどない、患者さんにとって優しい治療法ですね。
先生には、本誌2019年4月号のアルファ・リポ酸特集、同年11月号のオゾン療法特集、2020年5月号の漢方療法特集にご寄稿いただいています、どれも好評を博しました。ご寄稿いただけるくらいどの療法についてもよく学ばれていらっしゃるわけですが、メインに位置付けられている高濃度ビタミンC点滴にどの療法を加えるかの選択はどうされていますか。

聞きしていますが。
河合 私が開業して1カ月後に父が肺がんであることがわかり、しかもステージ4で余命半年との宣告を受けました。そこで何とかしなければと、アンチエイジング医療で学んだ高濃度ビタミンC点滴療法を父に行うことにしました。すでに、手術は受けられない病状でしたので抗がん剤と併用して高濃度ビタミンC点滴を行ったところ、抗がん剤の副作用が大きく軽減し腫瘍も縮小しました。抗がん剤治療は、効果が表れる前に副作用が強くて続けられなくなることも多いので、この併用はとても良かったと思っています。
さらに、QOL（生活の質）が格段に向上したことから「これは父だけではなく多くのがん患者さんにも享受して欲しい」と思い、自身のクリニックでがん治療に取り組みことにしました。

スタンスは、「標準治療
プラス高濃度ビタミンC
点滴療法」です
——身近なご経験から、がん治療で
の高濃度ビタミンC点滴療法の手ご
たえを感じられ、がん治療を始めら
れたんですね。
その後、高濃度ビタミンC点滴療
法だけでなく、広く治療法を取り入
れられたとお聞きしていますが、先
生のがん治療についてお話しくださ
い。
河合 当クリニックのスタンスは、
「標準治療プラス高濃度ビタミンC
点滴療法」で、あくまでも標準治療
が基本となります。もちろん、標準
治療が不適合になった方やどうし
ても受けたくないという方も受け入れ
させていただいています。
初診の際は患者さんのお話をし
じっくりとお聞きし、何を望まれて

河合 私の中では、高濃度ビタミンC点滴療法はがんを攻撃し、オゾン療法はがんに負けない体づくりというイメージを持っています。つまり、患者さんのお体を考えれば高濃度ビタミンC点滴療法とオゾン療法はいつしよに受けたほうが良いと思うのですが、費用面のことも考慮しなければなりません。
そこで、体力が落ちてきてしまったので体力をつけたい患者さんにはオゾン療法を加えたり、高濃度ビタミンC点滴療法の効果をさらに高めたいという患者さんには、ビタミン

治療で治された実体験を持ち、アメリカにも渡り痛みとアンチエイジングを学ばれましたので、どこの病院へ行っても解決しないで困っている患者さんの期待に応えられると思われました。実際に、遠方からも患者さんがいらっしやるそうですが、痛みを解消する「最後の砦」として今後も活躍ください。
それでは、がん治療についてお聞きします。先生ががん患者さんを見られるようになったのは、お父様ががんに罹られたことがきっかけとお



採血スペース



レントゲンやエコーの医療設備も整っている

河合 標準治療も含めてがんにも必ず効くという治療法はありませんが、高濃度ビタミンC点滴療法に関していえば、体調を良くするとか、疲れをと

Cをリサイクルしてくれるアルファ・リポ酸をお勧めしたりしています。

漢方は、標準治療を受けていらっしゃる病院ですでに処方されている場合は追加するようなことはしません。がん患者さんの血流の滞りを改善したり、落ちている免疫力や体力を上げたり、体調を整えたりする目的で使用します。

また、痛みを訴えるがん患者さんには、痛みを取り除くことは私の専門で基本は西洋薬を使いますが、がん性疼痛および抗がん剤の副作用による痛みには漢方の効果も期待できます。

患者さんとよく話し合いながら治療法を決めていきます

——治療の手ごたえはいかがでしょうか。

るとか、抗がん剤の副作用を軽減するなどのQOLを高める効果は十分期待できます。しかし、がんそのものに對しては大きく個人差があり、驚くほど効く場合もあれば、まったく効果がない場合もあります。

そのような場合には、オゾン療法や免疫細胞療法に切り替えるなど患者さんとよく話し合いながら、治療法を決めていきます。

また、治療法を決める際に役立つのが、CTC（血中循環腫瘍細胞）検査です。この検査は、血液を採取し、血液の中に流れているがん細胞の数を数えて予後を予測します。また、がん細胞の特徴を遺伝子から調べ、抗がん剤やビタミンCなどの天然成分、放射線療法や温熱療法の効果も予測できます。ただし、欧州に血液を送って検査しますので費用は55万円と高額なのがネックです。検査項目を減らしたのもあり、そ



「患者さんとよく話し合いながら治療法を決めていく」と話す河合院長

らは22万円です。

——今後、行ってみたいことはございますか。

河合 がん治療の選択肢は多いほうが良いので、これからも国内外の情報を集めて一定のエビデンスがあれば積極的に取り入れていきたいと思っています。

また、現在も食事指導を行っていますが、食は大切なのでさらにレベルの高いものにしていきます。無農薬・無添加などの自然食品を扱うスーパーマーケットの監修も始めましたので、発展させていきたいですね。

“がんをきつかけとした” “気づき”

——最後に、がん患者さんにメッセージをお願いします。

河合 真にお伝えしたいのは、「がんがあるうがなかるうが、今後どのように生きるかを考えていただきたい」ということです。私自身も同様ですが、がんがあつたとしても10年以上生きられる方もいれば、がんではなくても不慮の事故で明日亡くなってしまうことも絶対には言えません。ですから、がんをきつかけとした“気づき”で、新たな気持ちで豊かに生きていただくことが大切ではないかと思っています。

また、希望は絶対に失わないことです。この雑誌でもメンタルケアを特集するなど気持ちの面を重要視されていらつしやいますが、明るく前向きな気持ちを持てば治療結果は必ず良くなります。もちろん私も前向きな気持ちになれるよう、全力でサポートさせていただきます。

●フェリシティークリニック名古屋

名古屋市中区丸の内2-1-4-1-9

安藤ビル3・4階

TEL: 052-231-5025

<https://www.felicityclinic-nagoya.com/>